

論壇

国際基督教
大学教授

森本あんり



スラムで働き始めた。食べるものもなく寝るところもない人々、誰にも顧みられずに死んでゆく人々のために、奉仕の業を続けた。やがてその活動は世界の人々に知られるようになり、彼女は1979年

「聞く」ということは、「決断への促しを聞く」ということなのである。どのような決断かは、人それぞれであろう。イヤヤのように「わたしをお遣わしてください」と言うか、エリミヤのように「わたしには

では、なぜ神は語りかけるのか。それは、人間が自由な人格だからである。言葉は、人格と人格のコミュニケーションの方法である。語りかけを聞いた者は、それを解釈し、決断し、そして応答す

聞くと
応える

人はときに神の声を聞く。

それは、ただの思い込みかもしれない。幻聴かもしれない。神の声といっても、それは人間の言葉で聞こえるのか。神は日本語をしゃべるのか。男の声か女の声か。若い声か年寄りか。いや、それは

単に「何か大事なことを聞く」ということを宗教的に表現しているだけなのかもしれない。「人々の声」は、某新聞の一面コラムよりもずっと前に、ローマ時代から「天の声」として聞かれてきた。だがそこには、もう少し別の次元もある。

「アクネス・ゴンジャ・ボヤジュ」という人をご存じだろうか。今から1000年近く前、ユーゴスラビアの小さな町に生まれ、18歳で修道女となり、インドのゴルカタで学校の教師をしていた人である。ある日彼女は、汽車に乗っている時に、聞いた。「もつとも貧しい人々の間で働きなさい。」それが、彼女が聞いた神の声である。彼女は、その声に従い、町の

にノーベル平和賞を受けた。もうおわかりであろう。10年ほど前に亡くなった、マザー・テレサのことである。神の声を聞いた人は、必ず何かの決断をする。「神の声を

神の声を聞くとは

無理です」と言うか。いずれにせよ、神の声を聞く者に決断を迫らさずにはおかない。

ある。そのプロセスが、信仰である。母マリアも、しばしば神の声を聞いたに違いない。「お言葉どおり、この身に成りますように」(ルカ1・38)という

決断の力

ように「ルカ1・38」という

言葉は、従順さばかりが強調されるが、それは機械的な自動反応ではなく、彼女の主体的な決断の結果である。信仰は、この決断なしには生まれない。

決断である以上、そこには自由が前提されている。対人関係に悩む者は、「絶対に裏切らない友達や恋人」を求めますが、そんな関係はどこにも存在しない。逆に、裏切る自由のないところでは、そもそも約束という行為は意味をもたず、信頼や愛は存立し得ない。われわれは、裏切られる可能性を内に含むことなしに、相手を信ずることはでき

ない。傷つけられる可能性を引き受けることなくして、人を愛することはできないのである。

そして、このことをもっともよく存じたのは、ひとり子を世に遣わされた神ご自身である。だから神は、語りかけるのである。そして待つ。

われわれがなすべき決断は何か。自分の運命を引き受け、与えられている使命を選び取る勇気と確信を、われわれに与えてくれる力はどこから来るか。クリスマスは、神の静かな語りかけに、じっと耳を澄ます時である。

(もりもと・あんり)